九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

幕末鯨組の石炭使用

藤本, 隆士
福岡大学商学部

https://doi.org/10.15017/13555

出版情報：エネルギー史研究 : 石炭を中心として. 2, pp.5-5, 1973-12-10. エネルギー史研究会
バージョン：
権利関係：

幕末鯨組の石炭使用

藤本隆士

わが国近世の最大経営の一つであった鯨組は、その捕獲作業もさることながら、陸揚げしてからの解体・加工作業は、大変な規模を必要とした。

ここでは平戸藩生月島の鯨組主益富家の文書にみえる石炭史料を掲げておこう。

鯨は陸に揚げられると、色々な加工工程別の大納屋・小納屋・骨納屋に分けられる。加工製品は多いが、鯨油が蝗害（実は浮塵子（うんか））の防虫剤として実効があることが発見されて以来、農業必需品として諸藩の熱心な購入があったので、皮・肉・骨から可能な限り煎り出して油を製した。そのためには多量の燃料が確保されねばならなかった。

(1)「一　拾壱匁　石炭　一盃　」

(2)「一同三拾五匁（銀）　石炭　弐盃　幾太郎　立　」

(1)は慶応二年で、詳細は分らないが、銀十一匁で石炭を購入している。また(2)は翌三年で、「弐盃」を銀三十五匁で購入し、幾太郎が、船に乗っての勘定立になっている。幾太郎は、この年、五月十日と廿三日に伊万里行をしているのであるが、この石炭は廿三日の購入品目の中の一つである。だからこの石炭というのは、北松乃至その周辺の石炭であろう。

このように石炭が焚納屋の諸色品目に加っているが、他に

「一同四拾八匁三リン（銀）

薪木千四百六拾五斤

（中　略）

一同百弐拾三匁三分三リン

薪木凡三千七百斤

内五百斤　かし之木　」

と薪木の購入量は依然多い。右の史料が現在のところ私が見出した占炭であるが、これが直ちに、鯨油製作工程に使用されたか否かは明らかでない。石炭購入量は未だ僅かで薪木の購入量が多いことからみれば、試験的な段階ではないかと思われる。

右引用史料目を次に掲げておこう。

(1)　益富家文書、整理番号 No.1781「　慶応二寅年　御買物代諸色かり賃指引帳（旦那様　焚納屋）」

(2)　同　No.1788「慶応三卯春　銀諸色指引目録　（旦那様　焚納屋）」